

ゴーストランド 幽霊のいるアメリカ史 コリン・ディッキー著

Ghostland

評・森本 あんり (神学者
国際基督教大教授)

幽霊はイギリス文学がお好きかと思っ
たら、アメリカにも結構出るらしい。そ
れは、アメリカという国が理性と進歩の
実現に向けてひた走る国で、その陰に多

正史に隠れた願望、怨念

白人たちの罪意識の結晶で
ある。

幽霊に女性が多いのは日

本でも同じだが、アメリカでは特に、男性
聖職者が独占してきた来世との仲介業務
を無用化する、という点が重要だった。

20世紀に参政権を獲得する女性運動が心
霊主義(スピリチュアリズム)を推進力の
一つとしていた、という指摘も興味深い。

しかし、幽霊といえば白人ばかりが出
てくるのはなぜか。著者によれば、それ
は奴隷制度が徹底して黒人を「魂のない
体」として扱ったからである。魂がなけ
れば幽霊にすらなれない。KKK(クー
・クラックス・クラン)の被る白いフー
ドは、その黒人たちを労働力として南部
に留め置くための脅しの装束だった。

幽霊は、今も誕生している。経済破綻
したデトロイトの廃墟や2005年のハリ
ケーン・カトリーナは、現在の人間が
未来に語り伝えるべき教訓を問いかけて
いる。幽霊は、われわれ生者よりずっと
道徳的で良心的なのだ。熊井ひろ美訳。

◇Colin Dickey=1967年生まれ。

米国の作家、研究者。死、幽霊、奇怪な現象、
隠された歴史などを研究。



国書刊行会
3960円

くの不安や社会的不正義が隠されている
からだ、というのが本書の見立てである。
幽霊話には、公認の正史には登場しない
人々の集合的な願望や怨念が表現されて
いる。いわばそれは、深く抑圧したはず
の潜在意識が思いがけず表に現れてしま
う、フロイト的な「失錯」行為の共同体
版である。なかには、歴史的検証に堪え
ない話もある。それでも、物語は事後の
理論的解釈として語られ続ける。幽霊屋
敷は、過去と現在を繋ぎ、時間を空間化
して後世に伝える記憶装置である。

その一番手は、何といってもピュエリ
タン時代に魔女裁判があったセーラムだ
ろう。当時の担当判事の血をひくホーソ